

# 中間領域に着目した空間構成手法に関する研究 -代官山ヒルサイドテラスを事例として-

宇野研究室

4106061 友枝 遙

## 1. 研究背景

### 1-1. 社会的背景

現在、建築の機能分化により個々の建築で完結性を持ち、都市との関係が希薄になってきている。そのことから、いかに都市空間から機能を持つ内部空間に接続していくかを考察し設計することは、今後設計手法として重要視されると思われる。

### 1-2. 中間領域の仮定

黒川紀章は1960年代に中間領域論<sup>註1)</sup>を提出した。それは内外空間の中間、内部空間同士の間中等、対になる概念の間や両義を意味する論である。そこで本論文では中間領域を「外部空間と機能的内部空間(図1)の間に位置し、双方をつなげ調整する機能を持つ空間」と仮定した。

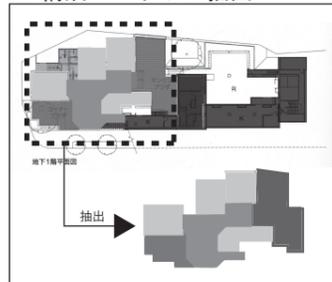
### 2. 研究対象及目的

ヒルサイドテラス(以降HT)は、楨文彦による、都市環境の変化に対応しながら設計された集合体である。<sup>註2)</sup> HTでは、①アーバンデザインという視点から都市風景を構築することと②群象形としての集合体の考察の双方がなされている。<sup>註3)</sup>したがってHTの内外パブリックスペース<sup>註4)</sup>は前述の仮定を満たす特有の中間領域であると考えられる。よって本論文では、HTを研究対象とし、1-6期各々がもつ中間領域を仮定に即して、実体を分析、比較検討することで中間領域の機能および空間構成<sup>註5)</sup>を分析、考察する事を目的とする。

### 3. 研究方法

作業①構成ユニット<sup>註6)</sup>の抽出: HTの中間領域を明確にする為に、敷地内を3つの主要空間に分類し、それらによる構成ユニットを抽出する。②-1外壁輪郭線による分析: 外壁輪郭線を抽出し、展開ダイアグラムを作成して壁面周辺の空間構成の変化を分析・考察する。②-2断面ダイアグラムの抽出: 断面の変化が見られる箇所を抽出し、断面ダイアグラムを作成して内部空間構成を分析・考察する。③外壁輪郭線と断面ダイアグラムによる分析: 外壁輪郭線の形状の変化と断面構成の変化の相互関係を把握する事で外→内を調整する中間領域の実体を把握する。

### 4. 構成ユニットの抽出

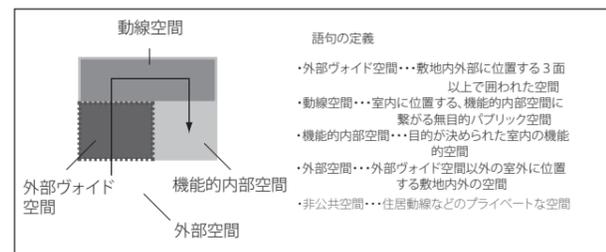


HTの中間領域を構成する主要空間を外部ヴォイド

	1期 AB 棟	2期 C 棟	3期 D 棟	6期 F 棟	6期 G 棟
構成ユニット					

▲図2 構成ユニットの抽出例 ▲図3 各工期における構成ユニット

空間、動線空間、機能的内部空間の3つとし、敷地内を分類する(図1)。1-6期のそれぞれに3つの主要空間により構成されたユニットが抽出された(図2, 3)。



▲図1 空間の分類

### 5. 外壁輪郭線による分析

#### 5-1. 外壁輪郭線の抽出

室内外の境界における空間<sup>註7)</sup>の機能および接続の変化を分析するために外壁輪郭線を抽出する。外部の動線と直接関係する外壁輪郭線のみ抽出した(図4)。

#### 5-2. 外壁輪郭線の分析

抽出した外壁輪郭線において壁面の方向性で壁面を区別し、所属・接続の連続的变化を見るために展開ダイアグラムを作成した(図5)。壁の裏表での空間機能の変化及び視線、動線による接続の変化について分析する。

#### 5-3. 分析結果

- 壁面方向が90°変化すると輪郭線の表裏の主要空間の機能が変化するものが多数見られた。
- AB, C, D棟において45°の壁面の角度変化が見られた。

### 6. 断面ダイアグラムによる分析

#### 6-1. 断面ダイアグラムの抽出

外部空間から機能的内部空間までの空間配列を分析するために断面ダイアグラムを抽出する。断面の変化の見られる箇所をすべて抽出し、連続して表示した(図5)。

#### 6-2. 分析

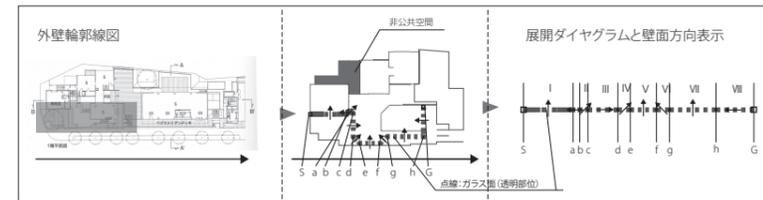
抽出した断面ダイアグラムにおいて中間領域の位置に着目して全体の空間構成を分析する。

#### 6-3. 分析結果

- 平面プランの変化に関係なく、断面図の中心部分は動線空間となっている事例が多数見られた。
- 外部空間と機能的内部空間の間に外部ヴォイド空間か動線空間が挟まれている事例が多数見られた。

### 7. 外壁輪郭線と断面ダイアグラムによる分析

#### 7-1. 相互関係の分析



▲図4 外壁輪郭線の抽出例

5. での外壁輪郭線による壁面方向の変化を表した展開ダイアグラムと6. での空間構成の変化を表した断面ダイアグラムとを重ね合わせることで、両変化の相互関係を分析する(図5)。1期AB棟においては、壁面方向が変化することに断面における主要空間の割合や、空間構成に変化が見られた。

### 7-2. 考察

外壁輪郭線の変化とともに動線空間の大きさに変化が見られ、機能的内部空間へ繋がる事から、動線空間が外部空間から機能的内部空間への接続に影響を及ぼしていると考えられる。

### 8. HT 各工期における比較考察と視覚的效果

HT各工期ごとで7. の分析を行ったが、外壁輪郭線と断面の空間構成の呼応関係に全体的な一貫性はあまり見られなかった。次に、HT各工期ごとの中間領域による視覚的效果を主要空間及び外壁輪郭線と断面構成の変化に着目し分類した(表6)。全体で3つの主要な視覚的效果が得られ、その効果を生み出す主要空間の位置を表により明示した。

### 9. 結論

中間領域を図面上で分析した本研究からは以下の事が明らかとなった。

		番号	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	サンクンガーデン
1期AB棟	室外	外空間										
		外部ヴォイド空間										
	境界	方向										
		展開ダイアグラム	S	a	b	c	d	e	f	g	h	G
	室内	動線空間										
		機能的内部空間										
断面ダイアグラム	内部動線											
	都市動線 旧山手通り											
連続写真		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	

▲図5 展開、断面ダイアグラム

脚註: 註1) 参考文献1), 註2) 参考文献2) p94 ~ p95 展開図表例, 註3) 参考文献3) 第1章『集合体 3つのパラダイム』~第3章『時と風景』註4) 参考文献2) p58 ~ p59 註5) 空間構成とは、(図1)に示す空間の配置方法のことを言う。註6) 複数の主要空間により構成された1棟の空間の集合体のこと。註7) 空間とは主に本文(図1)で定義した5つの空間のことを言う。参考文献: 1) 黒川紀章『黒川紀章著作集5 建築論1』p-p『黒川紀章著作集5 建築論II』p258-311『黒川紀章著作集9 都市論1』p159-292, 2006/11/10, 勉誠出版。2) 楨文彦『ヒルサイドテラス+ウエストへの世界-都市・建築・空間とその生活』2006/4/10, 鹿島出版会。3) 楨文彦『集合体に関するノート』論文。4) 寺内美紀子, 町田敦, 坂本 一成, 奥山信一, 小川次郎『街路型建築作品における外部ヴォイド空間の構成』日本建築学会計画系論文集, 第554号, 159-166, 2002/04。5) 楨文彦他『SD 道書 162 見えがくれる都市』1980/06/30, 鹿島出版会

▼表6 各工期における視覚的效果表

	主に確認された視覚的效果	確認された場所
1期 AB 棟	視野の広がり 上下階同時認識	a-c間 d-g間
2期 C 棟	視線の抜け 視野の広がり	a-c間 g-h間
2期 C 棟「	視野の広がり	b-e間
2期 C 棟」	視線の抜け	b-g間
3期 D 棟	視野の広がり	e-h間
6期 F 棟	上下階同時認識	c-f間
6期 G 棟	上下階同時認識 視野の広がり	d-g間(両方)

:場所は展開ダイアグラムの記号を指す  
上下階同時認識...半地下または吹抜けにより上下階を同時認識できる  
視野の広がり...内包する大空間により複数の機能的内部空間が同時に認識される。  
視線の抜け...機能的内部空間を通して異なる空間が同時認識される

①構成ユニット: 外部ヴォイド空間、動線空間、機能的内部空間の3つの空間によるユニットが各工期ごとに見られたことから、3つの空間は中間領域の主要構成要素として妥当だと言える。

②外壁輪郭線: 外壁輪郭線を見る事で壁面方向の変化に伴う主要空間の構成の変化が分かった。

③断面ダイアグラム: 中間領域の断面の空間構成における位置が分かった。

④外壁輪郭線と断面ダイアグラム: 外壁輪郭線の変化と中間領域の大きさの変化が同時に見られるものもあったが、全体としての一貫性は見られなかった。

⑤視覚的效果: 中間領域による機能的内部空間の視覚的認識の分類が出来た。

本論文においては、HTという、連続した形態の中で多機能が分散している建築を扱って研究を進めたが、この方法を現代的な離散する形態の建築において適応させ考察する事が中間領域を考察する上での今後の課題である。